

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい

- 1 野球チームにシヨゾクする。
- 2 弁解のヨチを残す。
- 3 最大のキキを救う。
- 4 親コウコウにはげむ。
- 5 心の中を察する。
- 6 資金を工面する。
- 7 人口分布を調査する。
- 8 法外な価格で売られている。

問二 次の文の中で、正しい使い方の語をア～ウから一つ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- 1 悪い（ア 収監      イ 習慣      ウ 週間）を改める。
- 2 ペットに（ア 愛称      イ 相性      ウ 愛唱）をつける。
- 3 思い出を（ア 改装      イ 回送      ウ 回想）する。
- 4 真夏の異常な（ア 厚      イ 暑      ウ 熱）さ。
- 5 薬がよく（ア 利      イ 効      ウ 聴）く。

## 二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

二十年ほど前になるだろうか、あるシンポジウムで、日本のデザイン界の重鎮ともいうべき方と同席した。彼は、デザインとは「表面を変える」ことだと、きわめてメイカイに言い放った。目の前のマイクをさして、「これをラッカーで黄色に塗るでしょう、**一** マイクはまったく別の存在になってしまいます」と。

デザインのこの定義にはうなった。ファッションデザインなんかを考えるともっと分かりやすいかもしれないが、モノの、あるいはひとつの表面を変えることで、それに接するひとの気分が変わり、取り扱**あつか**いが変わる。**二**、関係がごろっと変わってしまうのである。

現代を代表するデザイナーのひとり、**A** 深澤直人さん**B** もまた、デザインとは「サーフェスの変形」だと言う。サーフェスとはやはり「表面」ということだが、このときにはじぶん以外のものとの接点、もしくはそれにふれたときの感**かん**触**しよく**というニュアンスがより強い。サーフェスを変えることで、ひとのふるまいが変わる。何かをしたくなる、何かをさぐりにゆく、身体がむずむずする……。

その深澤さんは、ある著作のなかでも大切なことを言っている。建築から番組**②** セイサクまで、おざなりなデザインというのは、どこかひとを軽くあしらったところがある。「『こんなものでいい』と思いつながら作られたものは、それを手にする人の存在を否定する」というのである。

そして、深澤さんはこう続ける。人間は「あなたは大切な存在で、生きている価値がある」というメッセージをいつも探し求めている生きものだ。**三**、「これは大事に使わなければならない」と思わせるもの、あるいは逆に、「手に取った瞬間**しむんかん**にモノを通じて自分が大事にされていることが感じられる」もの、それがよいデザインだというのである。

いろいろ思い当たるふしがある。**C** わたしが通った小学校は、明治のはじめに造られた古い学校である。何度か改築されたのだろうが、わたしたちの教室があった本館は当時のままである。通っているときには気づかなかったが、先日四十年ぶりに訪れて、おどろいた。段差の小さい階段は大理石、手すりは彫**ほ**りをほどこした木製の柔**やわ**らかい手ざわりのものだった。子どもたちは無意識に、おとなたちがじぶんたちを大事に思っていることを、**③** コウシヤをかけずり回りながら、肌**はだ**で感じていたにちがいない。

歩いていていい街だなあと感じるときにも、同じような思いに浸**ひた**される。掃除**そうじ**が行きとどいているということもあるが、それも含**ふく**めて、**D** 住民がじぶんたちの住む場所を大切に思っているらしいことが、そこかしこ感じられる街は、どこか風格がある。

人間についてもきつと、同じことが言えるのだろう。もうどうでもいいと、じぶんの身体を傷つけたり、自暴自棄じぼうじせきになったりするのは、じぶんのことを大切に思えないような状態のなかにいるということだ。じぶんを大事に思う気持ち、これは昔から「自尊心」と呼ばれてきたが、「自尊心」もまた、他人に大事にされてきた、ていねいに扱われているという体験を折り重ねるなかで、じぶんはそれほど大切な存在なのだと思われるところからしか生まれてこない。

**IV** いまの子どもはたつぷりと玩具がんぐを与あたえられる。ぬいぐるみ、積み木、子ども用のカラオケ、ゲーム機。合成繊維せんい、ビニール、プラスチック、そして電子の声……。ほとんどの玩具が、深澤さん流の言い方をすると、「こんなものでいいでしょ」という感覚で作られている。はたして、ここからはどんな「自尊心」が生まれるのだろうか。

心理学者の霜山徳爾しもやまとくじさんがある料理人の言葉として紹介しょうかいしているのに、こんなものがある。「ものの味わいの判る人は人情も判るのではないかと思ひやす」。じぶんのために働いてくれるひとへの思いがないと、味は分からないというのである。じぶんのために何かをしてもらっている、じぶんがていねいに、そして大事に扱われている、そういう体験こそが、いつか「自立」のための、**F** 栄養たつぷりの腐葉土ふようどになるのだと思う。

(鷺田清一『大事なものは見えにくい』より)

問一 線①③のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄部 **I** **IV** にあてはまる言葉として適切なものを、あとの**A****カ**からそれぞれ選び記号で答えなさい。

- A** たしかに      **I** あるいは      **ウ** すると  
**E** だから      **オ** けれども      **カ** つまり

問三 線**A**「深澤直人さん」の発言として最も適切なものをあとの**A****E**から一つ選び、記号でなさい。

- A** デザインとは表面を変えることであると述べて、マイクをたとえとして用いた。  
**I** よいデザインとは、手に取った瞬間に自分が大事にされていることが分かるものであると述べた。  
**ウ** 味わいの判る人は、じぶんのために働いてくれる人への思いがあるひとだと述べた。  
**E** 明治時代に建てられた小学校は子どもたちにとって非常にすばらしい改築をしていると述べている。

問四 — 線B「サーフェスの変形」とあるが、これと同じ意味のことを本文中より六字でぬき出して答えなさい。

問五 — 線C「わたしが通った小学校」とあるが、筆者はこの学校の良いところはどのようなところだと述べているのか、本文中の言葉を使って、六十文字以内で答えなさい。

問六 — 線D「住民がじぶんたちの住む場所を大切に思っているらしい」とあるが、次の問題に答えなさい。

① 「住民がじぶんたちの住む場所を大切に思っている」とあるが、その説明をしたものとして、適切でないものをあとのA～Eから一つ選び、記号で答えなさい。

A 街路樹が植えられて、きれいに整備されているので道行く人々が楽しい気分になれる街。

I お年寄りや身体的障害者のために、スロープや手すりなどバリアフリーが行き届いている街。

ウ 水道管やガス管、道路整備などのために常にどこかで工事のための交通規制を行っている街。

E 通りすがりの人や、近所の人とすれ違ったときお互いあいさつをして気持ちよく過ごせる街。

② 「思っているらしい」と同じ用法で使われている「らしい」をあとのA～Eから一つ選び、記号で答えなさい。

A 中学生らしい服装を心がけている。

I 昨日の夜中に雨が降っていたらしい。

ウ 友だちの家であたらしいゲームで遊ぶ。

E もっとかわいらしいリボンが欲しかった。

問七 — 線E「『こんなものでいいでしょ』という感覚で作られている」とあるが、それはどのようなものか、解答欄に合うように本文中より、十九字でぬき出して答えなさい。

十九字  
もの。

問八 — 線F「栄養たっぷりの腐葉土」とあるが、腐葉土とは何をたとえているのか。本文中より四十八字でぬき出し、そのはじめとおわりの五字を答えなさい。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

徹也は沈痛な表情になった。自分を鼓舞<sup>①</sup>しようとするようなカラ元気と、気弱な様子とが、交互に現れ、表情が変わっていく。

「直美は、もうダメかもしれない」

肩を落として徹也はつぶやいた。試合でサヨナラ負けをした時にも、こんな表情は見せなかった。たぶんぼくも、同じような顔つきをしていなかった。ここ数日、ぼくは直美を避けて、見舞いに行かなかった。そのことが、悔まれてならなかった。

喫茶室は中庭に面していた。庭と言っても花壇などがあるわけではなく、砂利を敷いた地面のあちこちに、地下の通風口や配管が露出した、殺風景な空間だった。動くものは何もなかった。夕方の灰色の光線の下で、石や、壁や、鉄の配管が、無機物の鈍い光沢を放っていた。

時間が流れていく。こうしているうちにも、事態は悪化しているのかもしれない。だとしても、ぼくたちには、どうすることもできないのだ。喫茶室で時間をつぶしてから、手術室前の廊下に戻った。手術はまだ続いていた。しばらく廊下で、じっとしていた。神さまというものが、いるのかいないのか、ぼくは知らない。とにかく、何かに祈らずにはいられなかった。

手術室のドアの向こうからは、何の物音も聞こえてこなかった。ただどこからともなく、低いリズムが聞こえてきた。心臓の鼓動に似ていた。半ば消え入ろうとしている直美の命の息吹が、最後の力をふりしぼって、生きようとしている。そんな切なげな、規則的な鼓動が、低く持続している。テレビか映画で、患者の心臓の鼓動を増幅して聞かせる装置を見たことがある。同じ機械が、この病院の倉庫にもあった。あの音がそうだろうか。機械で増幅された直美の鼓動が、廊下まで伝わってきたのか。それとも、ぼく自身の心臓の鼓動なのか。あるいは、聞こえないはずの音が、不思議な超自然現象で、ぼくの耳に届いたのか。

**B** この音は、徹也の耳にも届いているのだろうか……。

たまりかねたように、徹也が歩き始めた。ぼくもあとに従った。徹也は再び、正面玄関の方に進んでいった。喫茶室は閉まっていた。外来患者の受付はとくに終了している。待合室に人影はなかった。天井の蛍光灯もすべて消え、薬局のわきの小さな電灯と、廊下の明りで、だだっ広い部屋の輪郭がかすかに浮き上がっていた。

C 「待つというのは、つらいものだな」

徹也は息をついた。それから、ぼくの方に向き直った。

「おい、何か言えよ」

ぼくは黙っていた。何を言えいいかわからなかった。不意に、徹也がぼくの腕をつかんだ。

D 「相撲をとろうぜ」

「相撲？」

「そうだ。相撲だ。身体を動かしていないと、気分がじりじりする」

「でも……」

ぼくは相撲なんか取ったことがない。子供の頃から、乱暴な遊びには加わらなかった。それに、徹也とぼくとは、体力が違いすぎる。

どうやら徹也は本気らしい。

「この椅子と、あっちの壁が土俵だ。触ると負けだぞ」

そう言って徹也は、床の上に手をつけて、仕切りの格好になった。こうなれば、仕方がない。テレビで見たことがあるから、やり方くらいは知っている。ぼくも床に手をつけて身構えた。

二人とも、紺のズボンにワイシャツという、制服姿だった。ズボンのベルトが、まわしの代わりだ。立ち上がるとすぐに右四つになった。体力に差があるので、ぼくは腰を引いて防御の構えをとった。

「お、やるじゃないか」

徹也の声が聞こえた。走るの苦手だが、マット運動などは得意だ。ピアノで鍛えているから、握力だって自信がある。上手を浅いところに持ちかえて、ぐいと絞った。ぼくは身体を揺すって寄り始めた。

「お、おっ」

声をあげながら、徹也は身体をひねり、左で上手投げを打った。足を送って残そうとしたのだが、引きずるような強引な投げで、二度、三度と振り回され、気がついた時には、背中から床に落ちていた。

肩と左膝ひざに、痛みがあった。

「もう一番、やるか」

徹也が言った。

「やる」

とぼくは答えた。

今度は、徹也は最初から突っ張って来た。長い手が回転よく飛び出してきて、まわしが取れない。□ 後退して、壁に押しつけられそうになった。とつさに右に変わった。丸い土俵ではない。前後の長椅子と壁だけが境界線だから、横に逃げればいくらでも逃げていける。

徹也は真剣な顔つきで追いかけてきた。ぼくは逃げる。駆けっこになれば、徹也にはかなわない。土俵として定めた平たい長方形をぐるっと一周したところで、腰のあたりをつかまれ、長椅子の背に向けて突き飛ばされた。

「おい、大丈夫か」

勢いがついて椅子の背を越え、クッションの上に肩から落ちて、さらに床まで落下したぼくに、徹也が声をかけた。

大丈夫といえる状態ではなかったが、ぼくは立ち上がった。

「もう一番、いくか」

とぼくは言った。

「お、やるか」

徹也は少し驚いた顔つきになった。

今度は、相手に突っ張りをさせないように、素早く飛び込んでベルトをつかんだ。徹也はしやにむに前に出ようとした。ぼくは重心を低くしてもちこたえた。

徹也の息づかいが聞こえた。ぼくも息が苦しかった。何も考えていなかった。ただこうして身体を動かしている限り、何も考えなくてすむ、という思いはあった。頭をからっぽにして、相手の身体の動きに神経を集中した。徹也はぼくの肩や腕に手をかけて、力まかせに押し、それから二度ばかり、身体を開いて小手投げを打った。ぼくはベルトをしっかりとつかみ、身体を密着させて投げを防いだ。投げがきかないと見ると、

徹也は再びむきになって押し始めた。ぼくは一步も引かなかった。引いたり、出し投げを打つことは考えなかった。全力を出しきって真正面から徹也の力に挑みたかった。ぼくの気持ち伝わったのか、徹也もそれ以後は投げや引き技は見せず、ひたすら前に出ようとした。肌寒いほどの涼しい日だったが、汗が流れ落ちた。徹也の息づかいがいつそう荒くなった。

身体と身体が密着し、互いのベルトや腕をつかんでもみあっているうちに、重心が揺れ、身体が大きく傾いた。ぼくは徹也の身体にしがみついた。徹也が突き放そうとする。足が絡んだ。倒れ込みながら、徹也は捨て身の投げを打った。身体が宙に投げ出された。それでもベルトは放さなかった。もつれあつたまま、ぼくたちは床に倒れた。勝ち負けはわからなかった。気がつくとき、ぼくは仰向けに倒れ、徹也の身体がぼくの上にかぶさっていた。身動きがとれなかった。

身体がほてっていた。背中の中の床がやけに冷たく、反対に徹也の身体は熱気を帯びていた。その熱い身体が、小刻みにふるえている。のしかかっている徹也の身体の重みで、息が苦しい。身体をずらして、やっと左手だけ自由になったぼくは、手を伸ばして徹也の身体をはねのけようとした。

ぼくは手を止めた。

徹也の身体がふるえているわけがわかった。

徹也はぼくの胸に顔をうずめ、声を殺して哭いていた。徹也の身体がふるえと、熱気と、重みとが、ぼくの身体にのしかかってきた。ぼくは伸ばしかけた手を、徹也の背中に回した。

(三田誠広「いちご同盟」より)

問一 ― 線①～③の語の意味として適切なものを、あとのア～ウからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① 鼓舞      ア なぐさめること      イ 気持ちをふるい起こさせること      ウ 鼓を打ち、舞いを舞うこと

② 増幅      ア 程度を強め、大きくすること      イ 幅の広さを測ること      ウ 大きな電圧をかけること

③ 捨て身      ア 物事をあきらめること      イ 人のためにつくすこと      ウ 命がけで行うこと



問二 空欄 **一** **二** にあてはまる言葉として最も適切なものを、あとの**ア**～**オ**からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア** ずるずると **イ** ぐらりと **ウ** きらりと **エ** くるくると **オ** ひらりと

問三 ——線**A**「無機物の鈍い光沢」とあるが、無機物として適切でないものをあとの**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア** 石 **イ** 金属 **ウ** 樹木 **エ** コンクリート

問四 ——線**B**「この音」とあるが、ぼくはどのような音だと感じたのか、適切でないものをあとの**ア**～**エ**から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア** 徹也の鼓動 **イ** 直美の命の息吹 **ウ** ぼく自身の心臓の鼓動 **エ** 直美の鼓動

問五 ——線**C**「待つというのは、つらいものだな」とあるが、なぜつらいのか。本文中の言葉を使って三十五字以内で答えなさい。なお、解答には次の語句を必ず使いなさい。

時間 事態

問六 ——線**D**「相撲をとろうぜ」とあるが、相撲をとろうと思ったのはなぜか、それを説明した次の文の **a** **b** に入れる言葉を本文中よりそれぞれ七字でぬき出して答えなさい。

ただじっとして待っているだけだと **a** するが、身体を動かしていると、 **b** すむから。

**問七** — 線 E 「ぼくは伸ばしかけた手を、徹也の背中に回した」とあるが、なぜ伸ばしかけた手を背中に回したのか、本文中の言葉を使って三十五字以内で説明しなさい。

**問八** 本文中の登場人物である「徹也」の説明として適切なものをあとの **A**、**E** から一つ選び、記号で答えなさい。

- A** 直美は大丈夫だと常にカラ元気を出して、ぼくを励まし続けてくれた。
- E** 手術室前にいるのがつらく、たまりかねて歩き出してしまった。
- ウ** 子どもの頃から乱暴な遊びには加わらずに、相撲なんかとったことがなかった。
- エ** マット運動が得意で、ピアノで鍛えているので握力にも自信がある。

**問題は以上です。**